

社会教育施設のあり方 「博物館」 将来ビジョン



令和3年11月
蒲郡市教育委員会 博物館

目 次

第1章 将来ビジョン策定の背景と目的	1
第2章 博物館の現状・課題の整理	
(1) 施設の概要	2
(2) 運営形態	4
(3) 運営の特徴	5
(4) 建物・設備面の状況と課題分析	5
(5) 利用状況に関する現状と課題	5
(6) 運営体制等に関する現状と課題	6
第3章 博物館に求められる市民ニーズ	
(1) 社会教育施設アンケート	7
(2) 市民・利用者のご意見（グループヒアリング）	12
(3) 市民ニーズの分析・整理	14
第4章 博物館の「目指すべき姿」	16
第5章 目指すべき姿の実現に向けて	17

第1章 将来ビジョン策定の背景と目的

蒲郡市博物館は、昭和54年に蒲郡市郷土資料館として開館以降、西館増築やギャラリーの供用等を経て、平成元年に「蒲郡市博物館」と名称変更し、現在に至っている。施設については、耐震性能は比較的高い状況にあるものの、すでに開館から40年以上が経っていることから、老朽化が進んでいる設備も多くあり、これまで修繕を積み重ねながら運営しており、今後も適切な維持管理が必要である。

一方、博物館を取り巻く状況については、国は「新しい時代の博物館制度の在り方について(平成19年:文部科学省「これからの博物館の在り方に関する検討協力者会議)」では、これからの博物館は、「資料の収集や調査研究等の活動を一層充実させるとともに、多様化・高度化する学習者の知的欲求にこたえるべく、自主的な研究グループやボランティア活動などを通じて、学習者とのコミュニケーションを活性化していく必要がある」としている。

また、「博物館の設置及び運営上の望ましい基準の見直しについて(平成22年:同上)」においては、電磁的記録の規定、社会教育の学習機会を利用して学習した成果の活用機会の提供、博物館における評価の実施や運営の改善に関する努力義務規定の新設、地域住民への情報提供等の新たに盛り込むべき内容と留意点が示された。

蒲郡市博物館においても、上記の指針等で示された内容を踏まえ、資料収集・調査研究を推進し、また市民・利用者とのコミュニケーションの活性化を目指し、様々な博物館活動を実施してきている。しかしながら現代社会においては、急激な技術革新に伴うDX(デジタルトランスフォーメーション)の広がりや、少子高齢化の進展、「人生100年時代」の到来に向けた社会の大きな変化等にも対応していかなければ、博物館は社会の変化とともに淘汰されかねない。

そこで、これからの社会状況を鑑み、市民ニーズを踏まえた「博物館のあり方」を策定し、蒲郡市の博物館にとってふさわしい「目指すべき姿」を明らかにすることで、これからの将来を見据えた事業展開を実行していく方針をここに示す。

第2章 博物館の現状・課題の整理

(1) 施設の概要

博物館は、収集・保管や展示等を通じて資料を一般の利用に供し、文化の発展に寄与するために設けられた社会教育施設である。

昭和54年に本館を建築、その後昭和63年に西館を増築(展示更新・ギャラリー供用開始)している。

博物館施設の機能は、大きく『展示』・『収蔵』・『調査研究』に分けられる。

【展示】

- ① 特別展示室(198㎡)
 - ・年に3回程、企画展を開催
 - ・企画展の合間は室内を区切り、テーマを設けたコーナー展示等を開催
- ② 民俗展示室(162㎡)
 - ・常設展示
 - ・塩田や三河木綿資料をはじめ、蒲郡で使われてきた生活の道具を展示
- ③ 歴史展示室(137㎡)
 - ・常設展示。考古資料、文献資料等、蒲郡市誕生までの通史を紹介
- ④ ギャラリー(180㎡)
 - ・市民文化祭や蒲郡っ子作品展等、市民の作品発表の場として利用
 - ・博物館企画展の副会場としても使用
- ⑤ 1階エントランス等
 - ・季節ごとのイベントをはじめ、スタンプラリー等を開催
- ⑥ 2階ロビー等
 - ・漁具の常設展示、テーマを設けた通年コーナー展示等を開催
- ⑦ 屋外展示
 - ・蒸気機関車(D51 201)、客車(オハフ33 2424)
 - ・復元移築された馬乗2号墳他、市内各所に遺されていた道標等

【収蔵】

- ① 第1収蔵庫(145㎡)仮収蔵庫(119㎡)・博物館倉庫(20㎡)
 - ・主に民俗資料を収蔵
- ② 第2収蔵庫(52㎡)・第3収蔵庫(75㎡)・第4収蔵庫(71㎡)
 - ・主に文献資料や絵画資料を収蔵
- ③ 特別収蔵庫(46㎡)
 - ・最も外気の影響を受けにくい構造であり、特に貴重な資料を収蔵

【調査研究】

- ① 研修室(76㎡)
 - ・講座や講演会の会場として利用
 - ・資料の調査や撮影、整理作業等としても使用

② 会議室(24㎡)

- ・博物館関連事業の会議や打ち合わせ、ギャラリー主催者控室として利用
- ・実習や整理作業場所としても使用



外観



特別展示室(企画展開催時)



民俗展示室



歴史展示室



ギャラリー(↑:未使用時、↓:使用時)



1階エントランス



2階ロビー
漁具コーナー

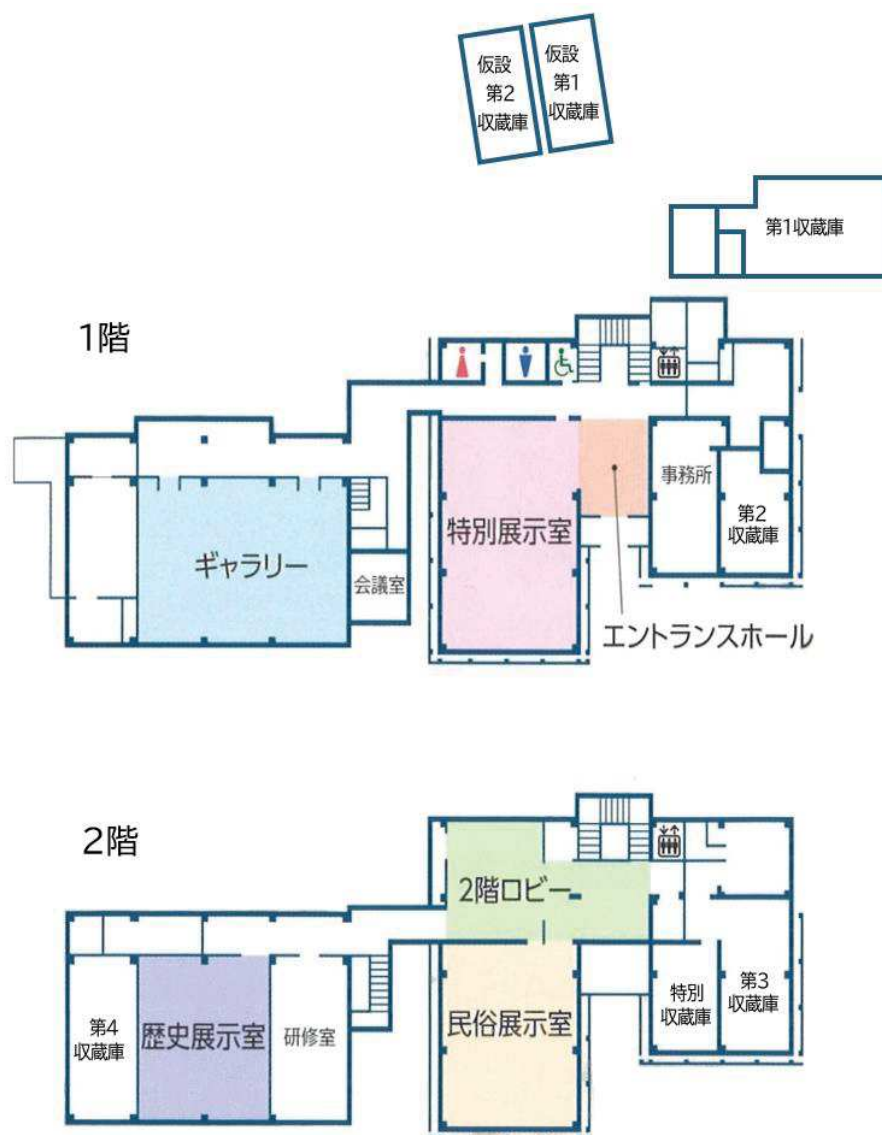


【博物館施設の現況(面積)】

	構造	延床面積	竣工	
本館	鉄筋2階建	1210.40㎡	昭和54年3月	
	IS値(※)	X方向	1階……1.31	2階……1.81
		Y方向	1階……1.47	2階……1.73
北棟	鉄骨平屋建	145.10㎡	昭和54年3月	
西館	鉄筋・鉄骨2階建	848.30㎡	昭和62年8月	
仮収蔵庫1	軽量鉄骨造	59.54㎡	平成13年2月	
仮収蔵庫2		59.54㎡	平成14年8月	
高麗門	木造	21.00㎡	平成3年12月移築	
博物館倉庫	鉄骨造	20.52㎡	昭和61年1月	
敷地面積		4,953.83㎡		

※IS値とは、建物の耐震性能を表すための指標。Is値が0.6以上の建物であれば、震度約6～7程度の地震に対し、倒壊または崩壊する危険性が低いとされている。

【平面図】



(2) 運営形態

開館以来現在まで、市直営で運営している。平成29年度に刈谷市がまとめた「博物館等施設の指定管理に関する調査」では、三河地区15自治体の過半数が「メリットが見出せない」として指定管理者制度を導入しておらず、学芸業務や資料管理を指定管理者が担っているのは1自治体のみである。学芸部門を正規採用し、市直営体制で運営することは人材の育成と定着に繋がる。また資料の寄託借用についても市直営のため成立しているといえる。

(3) 運営の特徴

主な事業は下記のとおりで、「博物館事業」と「文化財保護行政」を兼ね備えているのが当館の特徴である。資料の収集・保管・展示を行う博物館事業と文化財保護行政は密接に関連しており、博物館一課で兼ねている現在の体制は効率がよいといえる。

【博物館事業】

- ① 郷土資料(考古、歴史、民俗及び美術工芸等)の収集・保管・調査研究
- ② 企画展・コーナー展示・季節イベント等の開催
- ③ 展示のための施設の提供
- ④ 施設・設備の維持管理

【文化財保護事業】

- ① 埋蔵文化財発掘調査の実施・遺物整理
- ② 防火診断・防火訓練・大クス保全作業等、文化財の保護及び活用

【共通する事業】

- ① 文化財を博物館で保管する寄託・借用制度の実施
- ② 定期講座・一般向け出前講座・学校向け出張講座等の開講
- ③ 図録・調査報告書・郷土読本等の刊行

(4) 建物・設備面の状況と課題分析

博物館の本館は、外気の影響を受けにくい二重壁構造が特徴であり、展示・収蔵に適した環境管理のための専用設備が盛り込まれている。収蔵されている文化財等は、紫外線や寒暖差・温湿度差で劣化が進むものも多いため、環境変化の影響を極力抑える配慮が必要である。

建築から41年が経過しているが、平成29年度実施の耐震診断において本館建物の IS 値は十分な値を示しており、耐震性は確保されている。ただし、開館以来未更新で老朽化が進んでいる設備もあり、施設運営に支障をきたさないよう適切な時期に更新・改修を行う必要がある。

現在の収蔵資料は、民俗資料約5,600件、歴史資料約4,400件、考古資料約8,000件、美術資料約400件である。資料寄贈の打診を受けることも多いが、積層棚の設置や収納方法の工夫等で収蔵能力を高める努力をしてもなお、余力の厳しい状態が続いている。

(5)利用状況に関する現状と課題

館内では、市民から寄贈された民俗資料、遺跡調査等の成果を整理した考古・歴史資料の常設展示のほか、年3回の企画展、テーマを設けたコーナー展示や季節イベント・講座等を開催している。平成30年度の入館者数は約35,000人(次ページ参照)であり、ギャラリー利用との一部重複はあるが、歴史系の博物館類似施設の平均を上回っている。なお、全体の入場者数については、工事による一時閉室やコロナ禍の影響による変動はあるものの、直近5年は緩やかな上昇傾向にある。

ギャラリーの利用については、児童生徒の学習成果や市民グループの作品発表の場として、開館週数のうち6割弱利用されているが、春季・秋季の週末の利用が多く12月はほぼ利用がない等、時季にやや偏りがある。利用件数には、文化協会所属団体や個人利用だけでなく、市の主催・共催による催事や、博物館企画展の第2会場・夏休みイベントの会場としての利用も多く含んでいる。そのため、使用料免除の件数が多く、使用料収入には結びついていない。

※平成30年度文部科学省社会教育調査:歴史博物館の種類別博物館類似施設数2,858館、
同入館者数59,554千人、平均約21,000人

【博物館利用状況】

年度	開館日数	入館者数	ギャラリー利用		備考
			件数	入場者数	
H27	304日	31,188人	23(14)	12,174人	
H28	299日	29,216人	24(15)	13,265人	ギャラリー壁紙張替
H29	299日	35,846人	25(17)	13,749人	特別展示室壁紙張替
H30	299日	35,014人	27(19)	12,810人	
R1	284日	32,623人	18(15)	12,926人	臨時休館 (R2.3.2~3.24)

※ギャラリー利用件数欄の()内の数字は、市の主催・共催による使用料免除の件数

※令和元年度は新型コロナウイルス感染予防対策による臨時休館に伴い、ギャラリー利用も4件(うち2件は使用料免除)中止となった

(6)運営体制等に関する現状と課題

現在、常設展示の充実と併せて、企画展・イベント・講座等を通じて参加体験型の活動にも取り組んでいるところである。特に昔の遊び体験等は好評であるが、教育普及事業に要する人員が現状では不足しているため、要望に応えきれていない面もある。期待されている役割・求められている機能等を把握し検討する必要がある。

第3章 博物館に求められる市民ニーズ

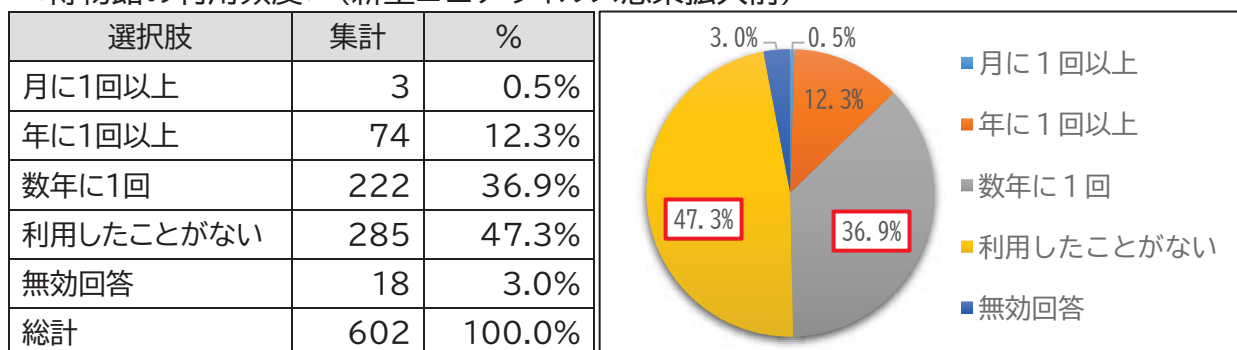
(1) 社会教育施設アンケート

市民ニーズを把握する一環として、下記のとおり市民アンケートを実施した。

調査対象者 蒲郡市民から1,500人を無作為抽出
 調査方法 郵送により調査票を送付
 調査実施期間 令和2年12月23日から令和3年1月14日まで
 回収数及び率 602件(40.1%)

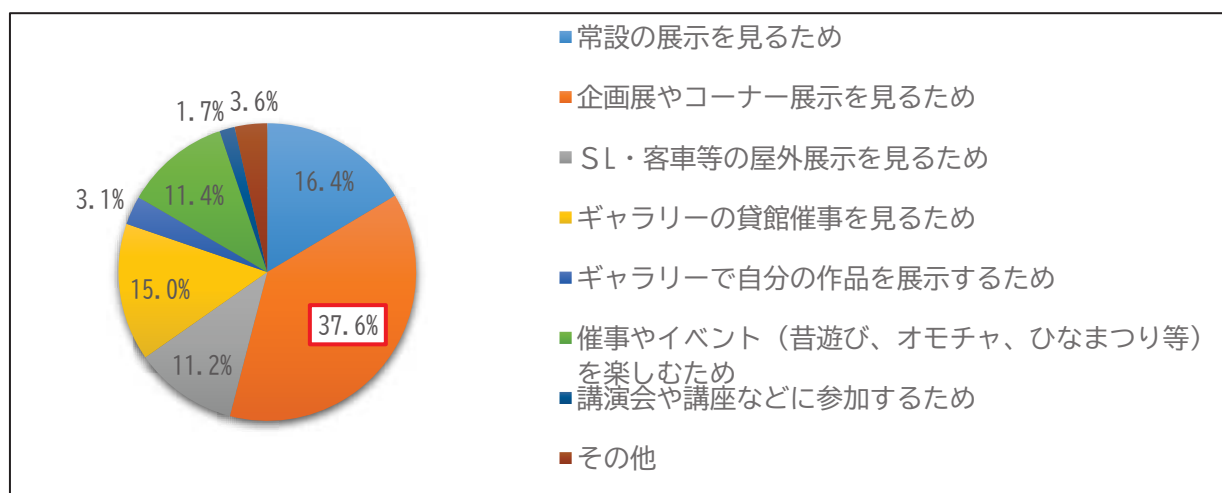
① 博物館の利用状況に関すること

<博物館の利用頻度> (新型コロナウイルス感染拡大前)



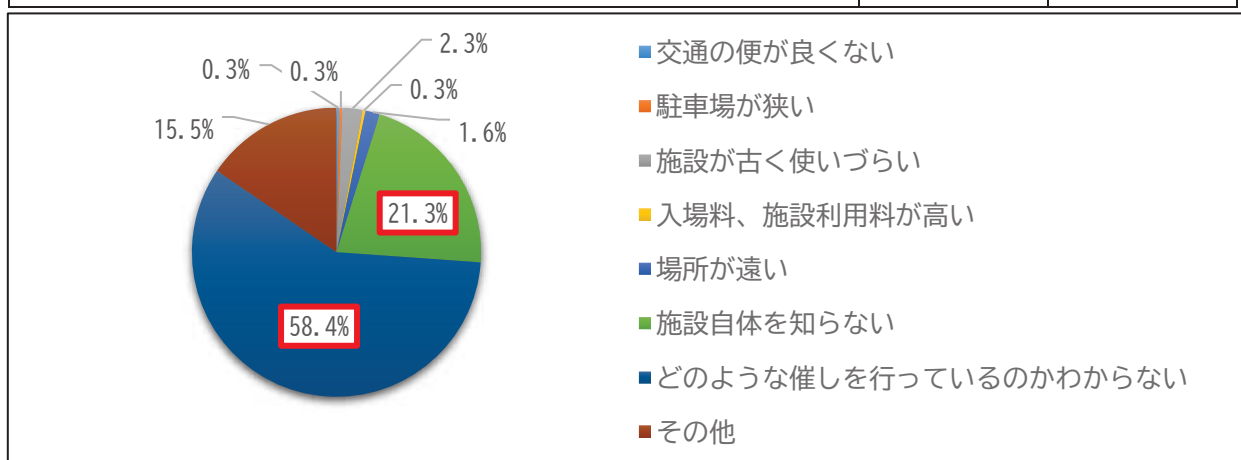
<博物館の利用目的> (複数選択可)

選択肢	集計	%
常設の展示を見るため	79	16.4%
企画展やコーナー展示を見るため	181	37.6%
SL・客車等の屋外展示を見るため	54	11.2%
ギャラリーの貸館催事を見るため	72	15.0%
ギャラリーで自分の作品を展示するため	15	3.1%
催事やイベント(昔遊び、オモチャ、ひなまつり等)を楽しむため	55	11.4%
講演会や講座などに参加するため	8	1.7%
その他	17	3.6%
総計	481	100.0%



<博物館を利用しなかった理由> (一つ選択)

選択肢	集計	%
交通の便が良くない	1	0.3%
駐車場が狭い	1	0.3%
施設が古く使いづらい	7	2.3%
入場料、施設利用料が高い	1	0.3%
場所が遠い	5	1.6%
施設自体を知らない	66	21.3%
どのような催しを行っているのかわからない	181	58.4%
その他	48	15.5%
総計	310	100.0%



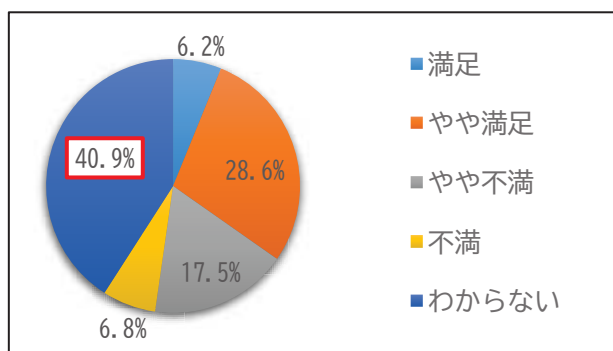
利用状況に関しては、回答者の47.3%が「利用したことがない」と回答し、その理由として、58.4%が「どのような催しを行っているのかわからない」、21.3%が「施設自体を知らない」としている。このことから、市民の認知度が低いことが分かる。

また、利用目的としては、企画展やコーナー展示を見るためのが多く、次いで常設展示・ギャラリー催事を見る事が挙げられた。

② 利用に関する満足度について

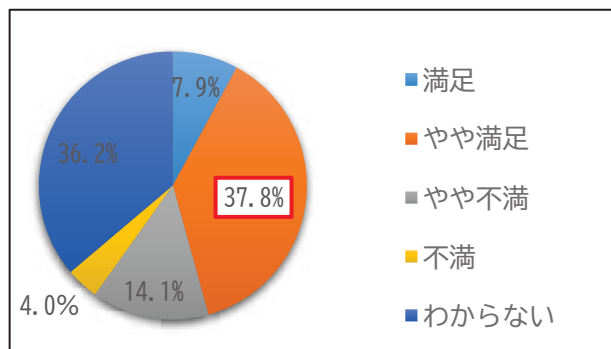
<常設展示の内容>

選択肢	集計	%
満足	19	6.2%
やや満足	88	28.6%
やや不満	54	17.5%
不満	21	6.8%
わからない	126	40.9%
総計	308	100.0%



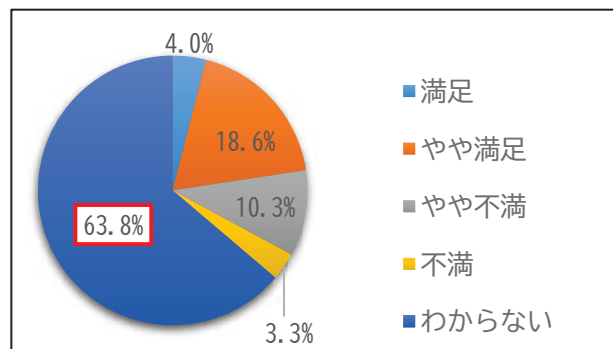
<企画展やコーナー展示の内容>

選択肢	集計	%
満足	24	7.9%
やや満足	115	37.8%
やや不満	43	14.1%
不満	12	4.0%
わからない	110	36.2%
総計	304	100.0%



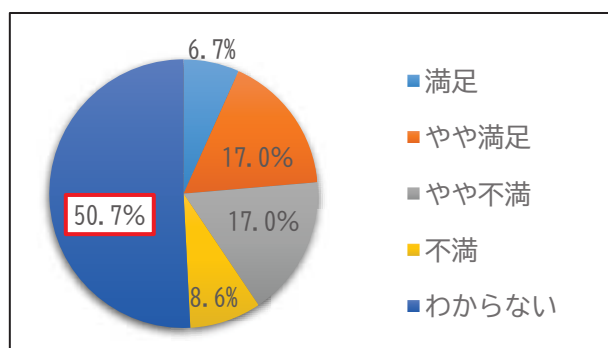
<イベント、講演会、講座の内容>

選択肢	集計	%
満足	12	4.0%
やや満足	56	18.6%
やや不満	31	10.3%
不満	10	3.3%
わからない	192	63.8%
総計	301	100.0%



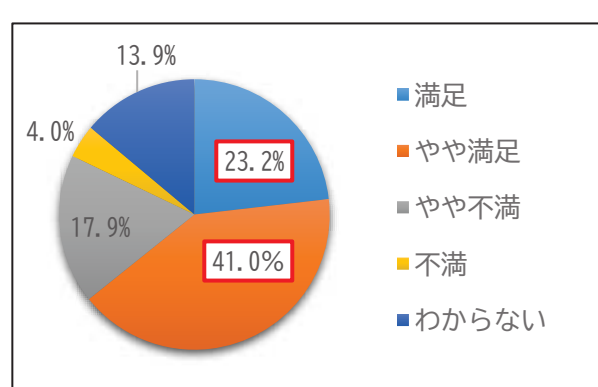
<トイレの快適性・清潔感>

選択肢	集計	%
満足	21	6.7%
やや満足	53	17.0%
やや不満	53	17.0%
不満	27	8.6%
わからない	159	50.7%
総計	313	100.0%



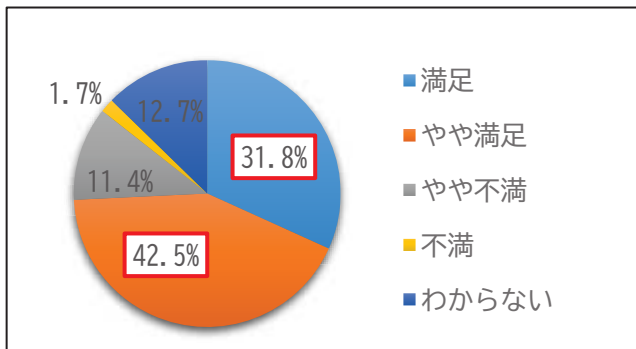
<駐車場の広さ>

選択肢	集計	%
満足	70	23.2%
やや満足	124	41.0%
やや不満	54	17.9%
不満	12	4.0%
わからない	42	13.9%
総計	302	100.0%



<交通の利便性>

選択肢	集計	%
満足	95	31.8%
やや満足	127	42.5%
やや不満	34	11.4%
不満	5	1.7%
わからない	38	12.7%
総計	299	100.0%

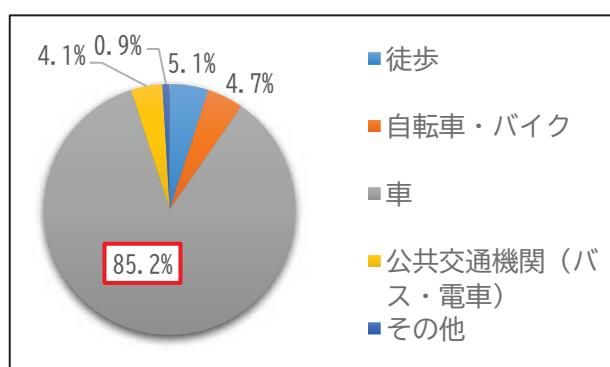


利用するうえでの「満足度」について、多くの項目においても、「わからない」が多数を占めている。利用者の中でも利用頻度によらつきがあるため、「分からない」が多いともいえるが、博物館についての市民の関心・周知が十分ではないといえる。
 企画展やコーナー展示については、満足度は比較的高い水準にあるといえる。また、駐車場・交通の利便性については、満足度が非常に高いといえる。

③利用するうえでの条件に関することについて(交通手段・立地)

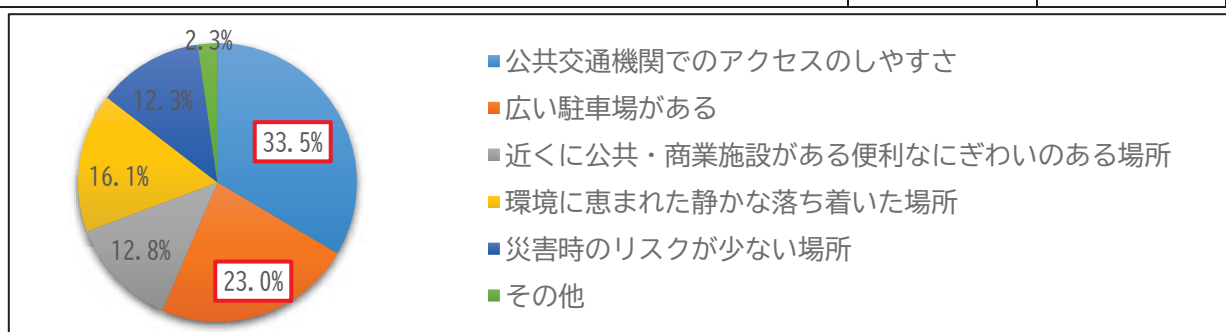
<博物館までの主な交通手段>

選択肢	集計	%
徒歩	16	5.1%
自転車・バイク	15	4.7%
車	270	85.2%
公共交通機関(バス・電車)	13	4.1%
その他	3	0.9%
総計	317	100.0%



<博物館の立地要件>(もっとも重要だと思うものを1つ選択)

選択肢	集計	%
公共交通機関でのアクセスのしやすさ	191	33.5%
広い駐車場がある	131	23.0%
近くに公共・商業施設がある便利なにぎわいのある場所	73	12.8%
環境に恵まれた静かな落ち着いた場所	92	16.1%
災害時のリスクが少ない場所	70	12.3%
その他	13	2.3%
総計	570	100.0%



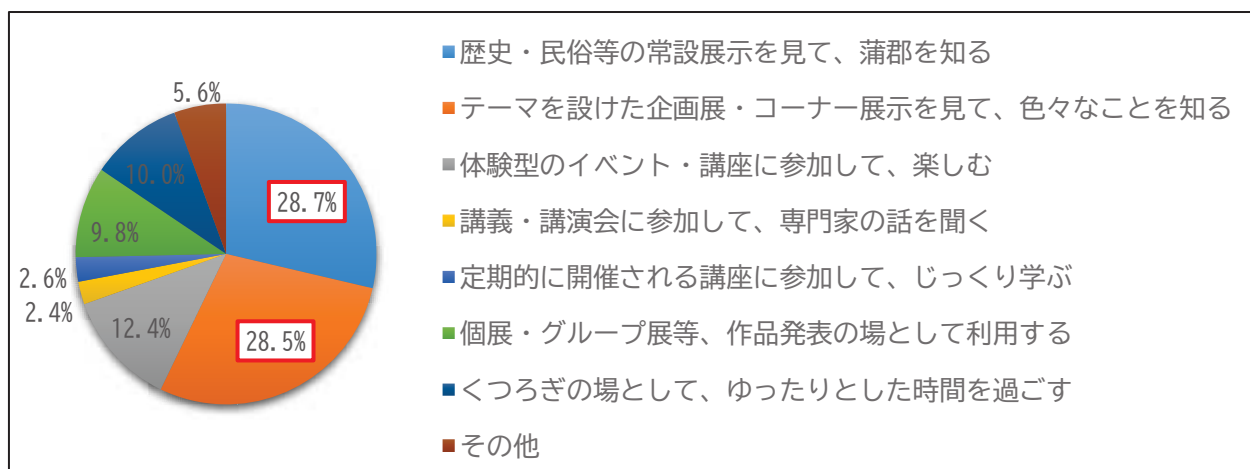
利用するうえでの、主な交通手段は、「車」が大半を占めている。また、立地条件においては、広い駐車場、アクセスのしやすさが重要視されている。

上記②の満足度において、上記の条件に対しては、満足度が高いため、条件面においては、非常に整っているといえる。

④今後の博物館に対するご意見について

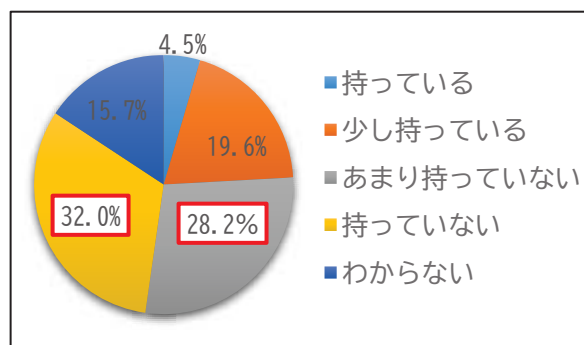
＜博物館をどのように利用したいか＞（もっともあてはまると思うものを1つ選択）

選択肢	集計	%
歴史・民俗等の常設展示を見て、蒲郡を知る	164	28.7%
テーマを設けた企画展・コーナー展示を見て、色々なことを知る	163	28.5%
体験型のイベント・講座に参加して、楽しむ	71	12.4%
講義・講演会に参加して、専門家の話を聞く	14	2.4%
定期的に参加される講座に参加して、じっくり学ぶ	15	2.6%
個展・グループ展等、作品発表の場として利用する	56	9.8%
くつろぎの場として、ゆったりとした時間を過ごす	57	10.0%
その他	32	5.6%
総計	572	100.0%



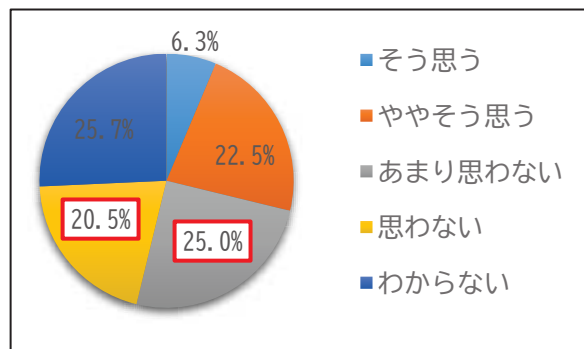
＜博物館への愛着＞

選択肢	集計	%
持っている	26	4.5%
少し持っている	112	19.6%
あまり持っていない	161	28.2%
持っていない	183	32.0%
わからない	90	15.7%
総計	572	100.0%



<博物館の今の姿を残していきたいか>

選択肢	集計	%
そう思う	35	6.3%
ややそう思う	124	22.5%
あまり思わない	138	25.0%
思わない	113	20.5%
わからない	142	25.7%
総計	552	100.0%



今後の博物館に対する意見では、常設・企画の展示で「知る」ことが多いが、「体験型イベント・講座で楽しむ」「くつろぎの場としての利用」といった意見も多く、求められるニーズは多様化してきているといえる。

また、「愛着」・「博物館の今の姿を残したいか」を問う項目では、非常に厳しい結果になっている。この結果を重く受け止め、これからの博物館をどのようなものにするか、十分な検討が必要である。

(2)市民・利用者のご意見(グループヒアリング)

市民・利用者の市民会館に対するニーズ、想いを把握するため、『社会教育施設についてのグループヒアリング』を開催した。

① 開催概要

博物館をはじめ、図書館、市民会館、生命の海科学館を含む4つの社会教育施設についてどのような体験をしたいか、またどのような施設にしていきたいか、それを実現させるためのアイデアについて、参加者に対して、グループヒアリングを実施した。

日にち:令和3年8月28日(土)、29日(日) オンライン開催
 参加グループ(人):公募グループ(20)・施設利用者グループ(30)、
 若者議会(※)グループ(17)、中学・高校・大学生グループ(32)

※若者議会とは、蒲郡青年会議所のメンバーにより設立され、未来の蒲郡を担う若い世代がまちについて学び、語り、発信していく機会づくりを目的とし、若い世代の力を活かしまちづくり政策を検討していく機関

②ご意見

■利用実態や広報について

- ・博物館とはどのような施設で、どんな展示や催事があるのか全く知られていない。ホームページ・PR 媒体等を工夫し、知ってもらうための検討・対策をすべきである。
- ・「蒲郡っ子作品展」「のびる子作品展」等の学校展示会で訪れる市民が多いのではないか。このような機会を利用して、博物館の展示を見ってもらうための仕組みや展示内容の検討をすべきではないか。

■「施設の立地や空間、設備」等に関する、利用向上のための方策

- ・場所が分かりにくく、また外観は暗く、重たい雰囲気が入りにくい。看板や案内を整備するとともに、花壇や絵等で雰囲気を明るく・オープンにするべきである。
- ・利用しやすくするために、ワークショップができるオープンスペース、またそれに伴う電源やWi-Fi等ネット環境、プロジェクター貸出等の新しい設備機能を充実させてほしい。
- ・疑似空間体験(VR)や携帯アプリ等を活用することで、展示解説や映像展示等を行い、より理解を深める。
- ・カフェなど飲食に関する機能を設置すれば、もっと明るく開放的な雰囲気となり、利用がしやすくなる。

■「展示内容や講座」等に関する、利用向上のための方策

- ・蒲郡市の歴史や自然などの地域に根差したことについて、もっと興味をもって学べる場所にするための工夫をしてほしい。
- ・展示するだけでなく、様々な「体験」・「講座」を通じて、楽しく興味や実感をもって学ぶことができるとうよい。(昔の道具を使う、展示関連のものを作る、昔の衣裳を着て記念撮影する等)
- ・謎解きゲーム、城下町ごっこ、ミニチュアワールド、博物館バックヤード体験など、今までにないような様々な体験イベントで盛り上げるのはどうか。
- ・博物館は美術館の役割を果たしている側面もある。美術の展示機能をより強化していくことが、利用向上につながるのではないか。
- ・校外学習で訪れる等、学校の授業と連携し、実物展示や様々な体験によって児童生徒の学びをサポートすることで、興味関心を高め、より深い学びに導くことができる。
- ・蒸気機関車D51の展示は、市民の印象に残るシンボルになる。メンテナンスへの参加や、様々な講座や体験に使うなど、様々な活用の可能性がある。
- ・過去の歴史だけでなく、現代や未来に向けたテーマの展示や企画を博物館でやるのも面白い。

■これからの博物館について

- ・他の施設や機能との複合化・連携を図って、利便性を向上させる。
- ・これからの博物館は、近未来の暮らしや子どもの未来に向けた施設にするのもよい。
- ・古い文化財の収集と同時に、まだ使える不用品のリサイクルやシェアリング(貸し借り)の拠点にして環境に役立ち、古い民具を認知症予防に活用すれば、福祉にも役立つ施設になる可能性がある。

(3) 市民ニーズの分析・整理

■ 周知手段の検討

市民アンケートの結果から、市民の47.3%は博物館を利用したことがなく、その内の21.3%は博物館自体を知らず、58.4%は博物館があることは知っていてもどのような催しを行っているのかわからないと回答している。

同アンケートの自由記述でも、「まったく情報が入ってこない。もっとアピールが必要」「各施設のイベント状況の発信や利用状態等広く広報して欲しい」「情報を得やすいとよい」等の意見・要望が寄せられている。企画展等で実施した博物館来館者アンケートでも「他から借りたものが並ぶときはもっとPRをしてほしい」「せっかくよい展示をしているので、もっとアピールしたほうがよい」等、PRが足りない点を指摘されている。

また、グループヒアリングにおいては、「蒲郡っ子作品展」「のびる子作品展」や蒸気機関車D51についてはある程度認識されており、その上での提案が寄せられた。一方で、「美術館機能」「SLボランティア活動」「小中学校の作品展示」について全く知らないことが伺える意見も見受けられた。

グループヒアリングでは「紙を配っても見ない」「広報がまごおり以外の媒体でも知らせる方法があるとよい」との声が寄せられた。今回の市民アンケートでは、催事情報の入手手段に関する設問が省かれているため、これまで情報が伝達されていない層に対してどのような媒体によるPRが効果的かという考察は難しい。地元に着した内容の企画展で実施した博物館来館者アンケートでは、広報がまごおりや知人からの口コミにより広まり、リピーターを生み出している傾向があったので参考にしていきたい。今後のアンケート実施時には催事情報の入手手段等の設問を設けて年代別に分析するなどし、現在行っている手法以外についても対応を検討していくべきであると考えている。

■ 企画展・常設展示の魅力の向上と体験・講座を通じた学びの機会の提供

市民アンケートでもグループヒアリングでも「蒲郡をもっと知る場所になるとよい」という意見が寄せられた。蒲郡についての知識を得られる施設として、市民や観光客に興味をもってもらうために、どのように魅力を向上していけるかが課題である。

令和元年度に開催した愛知県の移動美術館事業の来場者アンケートでは、次回開催を期待する多くの声が寄せられ、美術系展示に対する関心の高さが伺えた。グループヒアリングでも「美術展示機能の強化が利用向上につながるのではないか」という意見が出されている。

様々な体験をしたいというご意見は、グループヒアリングにおいて特に強く寄せられた。博物館では、数年前から「ひなまつり着付け体験」「子ども駅員の制服・制帽記念撮影」(現在はコロナ禍のため休止中)、企画展の内容をもとにしたクイズ、夏休み・正月の遊び体験コーナー、かぶとやうちわ、たこ等の工作イベント、土器に触れる考古学講座といった様々な体験イベントや講座を実施しているが、まだ浸透するまでには至っていない。既に行っているもののPRに加え、新たな試みの実施についても検討する必要がある。

■ 「くつろぎの場」としての快適性

市民アンケートからは、博物館を展示や体験の場だけでなく「くつろぎの場」としても利用したいこと、立地環境としては「にぎわいのある場所」よりも「静かな落ち着いた場所」を望んでいることが伺える。グループヒアリングにおいては、博物館入口までの導線における「ウェルカム感」の演出や、館内の雰囲気の高さを求める意見が寄せられた。

施設の快適性を求める声は、ハード面において一層顕著である。市民アンケートの記述

回答では、博物館のみならずどの施設も「全体的に古い」「トイレが不満」「暗い」「オシャレではない」と評価されており、公共施設に「居心地の良さ」「市民が楽しめる施設」という要素が求められていることがうかがえる。

■ 行き来しやすい利便性

駐車場・交通の便については満足度が高い。市民会館に隣接しており駐車場が広いことから、殆どが「車」で来館しており、以下「徒歩」「自転車・バイク」と続く。公共交通機関(バス・電車)は4.1%に留まっているが、市民アンケートの記述回答には「公共交通機関で行けないから車で行くしかない」という消極的な車利用者の声もある。

現在の博物館の立地は、鉄道でのアクセス・駐車場・近隣のにぎわい等については、市民が重要だと考える要件をほぼ満たしている。

第4章 博物館の「目指すべき姿」

第2章での「博物館の現状・課題の整理」、第3章での「博物館に求められる市民ニーズ」の内容を踏まえ、博物館の目指すべき姿は、以下のとおりとする。

「温故知新(ふるきをたずねてあたらしきをしる)」
体験を通して、蒲郡の歴史と文化を市民が身近に感じる
『明るく楽しい博物館』

■ 蒲郡を「知る」施設 — 過去から現在までを学ぶ博物館

市民・来館者が抱いている蒲郡の歴史や文化への興味・関心を把握し、資料の収集・保管・調査研究等の蓄積を活かした魅力ある企画展・常設展示や体験イベント・講座を提供する。文化財や郷土の偉人について掘り下げて紹介する取り組みを継続し、郷土愛が育まれる土壌を作る。

■ 蒲郡を「遺す」施設 — 現在から未来に文化を伝える博物館

現在まで遺る貴重な資料を散逸させることなく次世代へ守り伝えていくためには、文化財保護事業への地域の理解と協力が不可欠である。「今」もやがては「歴史」になることをふまえ、地域との繋がりを深め、蒲郡に伝わる文化を「財(たから)」として遺し、未来へと繋ぐ。

■ 蒲郡を「広める」施設 — 市民と繋がる博物館

これまで十分に伝達できていなかった層への情報発信方法を検討し、市民・利用者への広報の強化を図るとともに、「学び」・「財(たから)」を市民へ提供する方法についても、歴史資料の現物の保管に力を入れつつ、市内で失われつつある風景や人々の営み等のアーカイブ化を推進するなど博物館におけるDX(デジタルトランスフォーメーション)の推進を行うことで、博物館が存在意義を発揮して来館者の視野を広げ、新たな知的欲求に応えるという循環を形成できれば、更なる発展が見込まれる。

また市民と繋がるために、他施設が持つ機能との連携を視野に入れ、様々な手段・方法で利用者の拡大を目指す。

第5章 目指すべき姿の実現に向けて

(1)郷土愛の醸成と文化財保護

展示・講座等を通じて、市民が民具の使い方・古文書の読み解き方を知ることは、先人の追体験であり、新たな知見を得て郷土愛が深まるきっかけとなる。その機会を市民に提供し、地域の共有財産として活用していくことは、博物館の重要な役割のひとつであると考えられる。企画展開催と並行して近年注力している「昔の遊び」「ひな人形展示」等の季節のイベントは、祖父母・親世代が自身の体験を子・孫世代に語り伝える好機であり、思い出が重なっていくことで博物館への親しみも醸成される。各分野から蒲郡ならではの題材を取り上げて、幅広い年代層に興味を持って足を運んでもらえるような展示・イベントを企画し市民がふるさとに誇りが持てるよう愛郷心を培っていく。

漁業・三河木綿・塩田・祭礼等の民俗資料、現在まで遺る城跡・遺跡や文献資料は、地域の先人からの遺産である。博物館の常設展示資料は殆どが無償で寄贈されたものであり、金銭に換算できないからこそ、公が管理を行う必要がある。文化財を保護し、収集・保管する博物館はその拠点であるため、適切な維持管理に努める。

(2)企画展の充実とギャラリーの活用

市民アンケートでも、企画展やコーナー展示は主な来館動機である。「魅力的な展示内容」であることは大前提だが、単に展示物を見るだけではなく「もっと詳しい話を聴きたい」「展示資料に触ってみたい」「今までにないような体験イベントで盛り上げてほしい」等、一歩踏み込んだ体験が望まれている。

企画展の充実は、当館においても近年特に注力している。市民や来館者の興味・関心を把握し、時事や節目にも柔軟に対応した企画立案を実施する。また、調査・研究にも重きを置き、松平氏・鶴殿氏らの旧領地等全国各地に保管されている資料の掘り起こしを図って企画展の質を向上したり、蒲郡の魅力の再発見に繋がるような関連講座等を実施したりすることで、より深く知りたい市民に向けた学びの機会を設けていく。市内の他施設・団体や県内の博物館・美術館と連携してイベントコラボ等も実施し、施設の魅力を強化する。

博物館は条例で特別な企画による展示を除き観覧無料と定められており、施設の利用料金についての満足度は高い。博物館の企画展開催期間に並行してギャラリー催事を充てることで相乗効果が生まれ、来館者や作品発表利用者の増加へと繋げられるので、児童生徒や市民の作品発表の場として幅広く利用してもらい、各世代が気軽に訪れる場とする。

ギャラリー利用が少ない時季については、利用案内を広報して利用を促したり、自館イベントを開催したり、広い場所を必要とする資料整理作業に充てたりして有効に活用する。

(3)学校教育との連携

博物館を訪れて学芸員の説明を聴きながら資料を見る団体見学は以前から受け入れているが全ての学校が来館するのは困難であるため、近年は学芸員が学校へ資料を持参する出張講座も実施しており、実物資料を目の当たりにすることで、教科書の学習単元の理解がより深まると同時に、子どもの頃から博物館との関わりを持つことができる。前述の

活動を発展させて、児童生徒が自ら学んだ成果を博物館で発表展示した事例もあり、学校と地域と博物館を繋げる場となっている。今後も学習単元と地域学習を絡めた新たな講座メニューの追加や、Zoom等を利用した出張講座等、紙上だけでは伝わりづらい情報を自ら体験できる機会を設けていく。

平成19年度以降、時代・テーマごとに郷土の歴史をまとめた副読本「図説がまごおりの歴史」を毎年小学校6年生に配布し、地域学習の教材となる情報を提供している。これをテキストとした授業や課題へのサポートを実施し、郷土への興味に応える。

児童生徒の図画工作・美術作品等を展示する「蒲郡っ子作品展」「のびる子作品展」は、家族とともに博物館を訪れる機会となっており、そこから常設展示や企画展への関心を広げていけるように努める。

学習単元以外の関わりとしては、生徒・教職員の職場体験や、地元出身学生の学芸員資格取得のための博物館実習等がある。これらを積極的に受け入れ、博物館活動に親しみ文化財に関心を持つ人材の育成を支援する。

(4) 広報・情報発信の強化、提供方法の多様化 ～博物館DX～

市民アンケートから、これまで行ってきた広報やチラシ・ポスター、無料マガジン等の紙媒体、ウェブサイトやメール等のネット媒体からのPRでは、「博物館の存在を知らない層」「どのような催しを行っているのかわからないから足を運ぶ機会がなかった層」には情報が届かないことが浮上した。

幅広い世代へ向けて数多く情報の種を蒔いて興味を芽吹かせ、現在情報が届いている層からも更に枝葉を広げるために、展覧会告知サイトやSNS等の新たな情報伝達手段を実施し、周知を図る。

また、歴史資料のアーカイブ化などデジタル媒体による提供方法の多様化を推進することで、博物館を身近に感じていない市民に、博物館の魅力をアピールする。

(5) 親しみやすい、空間形成と機能連携

建物については「暗い」という印象を持たれがちなので、外壁修繕の際には落ち着いた色調のある明るい色調を選択肢とする。ファミリー層や愛好家からは「機関車D51がある場所」として認識されており、写真撮影をしている姿をよく見かけるが、SLだけを見て帰ることもあるため、玄関先にデジタルサイネージを設置してPRする等、駐車場から機関車D51までの空間を再考し、博物館催事に興味を抱かせるような工夫が必要である。

エントランスや歴史展示室に設置されている地図模型の更新時には新技術を取り入れた来館者の興味を惹くようなコンテンツとする。いつでも気軽に立ち寄り知識を得られるよう、引き続き観覧無料を原則とし、「市民が身近に感じる学び舎」となる博物館をめざす。

また、多くの市民が集う図書館や市民会館などの社会教育施設で、博物館への来館の動機づけとなるような出張展示等を開催するなど、他の施設機能との連携を図り、博物館から市民に親しみやすい取組を実施する。

社会教育施設のあり方 「博物館」 将来ビジョン

発行・編集 蒲郡市教育委員会博物館
〒443-0035 愛知県蒲郡市栄町 10 番 22 号
TEL : 0533-68-1881
FAX : 0533-68-1880
